

# 中国文化の贈り物

## —性善説—

吉 田 公 平

### 一 日本における心学・性善説の展開

日本は漢字文化圏の恩恵をたっぷりと受ける形で歴史時代に入りました。多種多様な恩恵の中で、最大のもは性善説であったという考えを述べます。漢字を知って話し言葉、思索の世界を記録する手段を得たこと。政治制度を学んだこと。仏教を受容したこと。絵画・音楽・舞踏など芸術に目が開かれたこと。生産生活技術を身に付けたこと。何れも漢字文化圏との交流が契機となって飛躍しました。生活世界をエコノミック（労力節約）に豊かにすることができたという点では、その恩恵はとても大きかったのです。

一例を挙げます。中国では漢字による表記が安定するのは紀元前2世紀頃ですが、記述する文字を創案して（殷代の甲骨文字）、後漢の『説文解字』に落ち着くまで、凡そ2000年が掛かりました。ところが日本が朝鮮渡来の情報を得て漢字を知り、その後、カタカナ・平仮名を考案して、日本語を記録する手立てを身に付けました。若し、自前で日本文字を創案することを余儀なくされていたとしたら、日本の文化史は1000年位は遅れたかも知れません。

極端な言い方をしますと言葉を記録する自前の文字を創案することなく、或いは又、他文化の文字を活用することがないと、所謂歴史時代に入る事が極端に遅くなります。その典型の一つがフィリピンです。先史時代のままに近代の植民地時代に入りました。その意味では日本が漢字文化圏の中で歴史時代を迎えることが出来たということは幸運でした。

その幸運な贈り物の中で、性善説を受容できたことが、最大の恩恵ではなかったか、と思います。人間の本質とは何か。いかに生きたら皆と共に幸せになれるのか。という問いを投げかけてくれたからです。

性善説は孟子の創案です。孟子が儒教の思想体系の中で枢要な位置を担うのは宋代の朱子が編纂注解した『四書章句集注』以後のことです。儒教・朱子学が日本に紹介される前に、仏教思想が流入しますが、いかに救われるか、が主題でした。儒教の場合は、皆と共にいかに生きるか、が主題でした。中国で儒教・朱子学が思想界の主導権を握るようになったころ、日本から中国に留学したのは仏教徒が主流でした。彼等は儒教・朱子学に全く関心を示しません。その典型の独りが道元禅師（1200-1253）です。朱子の『中庸章句』が朱子の没年（1200）に日本に入ってきますが、さしたる関心を引きませんでした。

禅僧の間で朱子学が読まれますが、内容を理解できなかつたようです。

宋明性理学・新儒教の特色は修己論と治人論を二焦点とする楕円形の思惟構造です。日本が宋明性理学・新儒教が本格的に受容されるのは17世紀、江戸時代になってからです。17世紀は大航海時代が開始して已に一世紀半。西学・キリスト教が東アジア漢字文化圏に押し寄せ、大きな刺戟を与えます。その中で、日本は戦国時代が終わり徳川幕府が誕生して、諸藩（地域政権）との連合体制を構築し、平和な時代になりました。中国では1644年に明清の政権交代がありましたが、日本の幕藩体制は鎖国政策を実施してむしろ安定します。闘いの時代から平和の時代に政治環境ががらりと変わります。殺し合いの時代から共に生きる時代への転換です。殺し合いの時代には、いかに覚悟して殺すか殺されるか、武士にこの覚悟を促したのは禅学です。殺される庶民の覚悟を導いたのは浄土宗です。

しかし、殺す・殺される戦国時代を終えて、平和の時代になった江戸時代には、いかに生きるか、が主題になりました。この気運に答えたのが儒教・性善説です。その流れの一つは、藤原惺窩（1561-1619）・林羅山（1583-1657）の系譜です。林羅山は徳川幕府の庇護の下、中国から渡来した漢籍を広く読む機会に恵まれました。藤原惺窩・林羅山師弟は未知の新文化を紹介する先駆者です。しかし、紹介型の門下からは独創的な思索者は誕生しませんでした。恐らく吸収し理解するのが精一杯だったのだと思います。

この師弟・一門が広く漢籍を読むことが出来たのは、政治環境が安定して、中国・寧波から大量の漢籍を恒常的に輸入することが出来たからです。日本の歴史始まって以来の壮観でした。読者はその視野の広さ、思索の深さに驚きました。勢い熱心に読み耽りました。その結果、儒教理解の精度が17世紀になって一段と飛躍しました。その意味では紹介者たちの功績を評価したいと思います。中国の新思想を知識として吸収し、触発され、紹介して普及を図るという流れは近代に及ぶまで一貫します。

もう一つの流れは、中江藤樹（1608-1648）に代表されます。中江藤樹は祖父の養子となり、武士になりますが、闘いの時代が終わった事を洞察した祖父に促されて儒教・朱子学を学びます。徳治主義を説く儒教は基本的には平和学だからです。中江藤樹にとって、平和をもたらされたこの時代に、独りの人間としていかに生きるか、が第一義の課題でした。知識として習得することが主眼ではありませんでした。朱子の『四書章句集注』を熟読して、性善説を理解することに精力を傾注しました。殆ど独学です。27歳の時に武士の身分を捨てて庶人となりました。中江藤樹はとことん修己論に焦点を絞って、朱子の『四書集注』『四書大全』を読み進めます。その中で、朱子が説く生き方に生き苦しさを覚えて、懊悩します。この懊悩に窓を開けてくれたのは、王陽明・王龍溪師弟の説く良知心学です。

しかし、良知心学にも不満を覚えます。良知心学が説く心性論（生身の人間とその本質をめぐる思索）が、人間悪について深刻に探求していないからです。中江藤樹は人間の本

性は確かに本来は善であるが、同時に悪の種をも伏藏していると考えました。悪の種を「意」と捉えました。良知の力を信じて悪の種である「意」を伏藏したままに押し込めて發露させるな、といいます。朱子学とも陽明学とも異なる、独創的な誠意説です。この点を高く評価して藤樹学と呼称することもあります。単純な性善説ではないのです。人間悪を深刻に受けとめて心性論に組み込んだ所に特色が有ります。

林羅山の系譜、山崎闇斎の系譜の人々は、国学・神道を基底にしながらか朱子学を熱心に受用しました。この学派でも性善説が人間理解の基本でした。伊藤仁斎（1627-1705）は朱子学に楯突いて「古学」（原始儒教）の再興を模索しますが性善説そのものは継承します。荻生徂徠（1666-1728）は、修己論を捨てて専ら治人論に焦点を絞って、礼学制度を重視した政治思想を構築しました。修己論を捨てるとは、個々人が人格を陶冶して生きがい覚え、自力で自己を悪から解放するという人格主義を最初から視野に収めないことを意味します。

荻生徂徠のような考え方は中国古代にも居ました。法家の韓非子がその典型です。荻生徂徠は当時は現代の韓非子であると酷評されました。又宋代の陳亮・葉適などの所謂事功派の人達は、政治的に成果を挙げるのが第一であると主張して、心性論に耽ることには冷淡でした。

日本では中江藤樹の門人で熊沢蕃山などは中江藤樹に受けた学恩には感謝しながらも、修己論・心性論だけでは政治的責任を担いうる人材は育たないと、中江藤樹一門とは距離を置きました。又、幕末維新期に陽明学・朱子学に学びながらも、国際的にも国内的にも激動の時局を迎えたと覚悟した大橋訥庵（1816-1862）は、旧来の新儒教は無力であると決め込んで尊王攘夷運動に邁進します。大橋訥庵にとって、性善説は無力な空論でしかありませんでした。儒教思想を政治的成果を挙げることに特化した儒學徒たちは、かつて荀子が孟子の性善説を書斎の空論と唾棄した如く、性善説は嘲弄的でした。しかし、性善説に冷淡な儒者はごく少数でした。

江戸時代を通じて庶民階層に深く浸透したのは石田梅岩（1685-1744）が創唱した所謂石門心学です。朱子学の性善説を下敷きにした石田梅岩の修己論は庶民社会、殊に町人・商人社会に支持者を得ました。石門心学運動は組織的に全国規模で展開されました。ここでは儒学は支配の哲学ではなくして、市民が一人の人間として豊かに生きることを願う、自力主義の宗教思想として活学されました。中江藤樹の門流でも庶民層が主役でした。日本では科挙制度が実施されなかったので、儒学・性善説を受用したのは武士階級ばかりではなく、むしろ庶民階層がいかに生きるかを主題とする修己論に焦点を当てて担いました。

江戸時代は幕藩体制に支持された宗教は仏教です。キリシタン禁制を徹底するために、国民の全てが仏教寺院の信者・檀徒になることを強制されました。ですから、表向き仏教

徒でありながら、併せて儒教心学を学びました。その儒教徒の圧倒的多数派は、性善説を基軸にした心性論を骨格とする儒教心学を受用しました。特に18世紀に各藩（地域政権）が設立した藩校、及び民間に数多く設けられた漢学塾では、『四書章句集注』が基本テキストでした。性善説が国民的規模で浸透することになりました。

江戸時代の幕藩体制が崩壊して、明治時代になると国政が中央集権体制をとり、西欧の政体を参考にして近代国家を樹立する模索を続けます。天皇制と家族制度を結合した国政を構築し、その中で教育制度が整備されました。江戸時代には儒學は、檀家制度に保護された仏教思想に抗議した思想運動でしたが、明治時代以降は「天皇制と家族制度の結合」という国政の中に取り込まれてしまい、抗議する姿勢が薄弱になります。

抗議する役割を果たしたのは西欧渡来の啓蒙思想です。啓蒙思想の担い手の基礎教養は儒学でした。彼等は儒学思想の中に啓蒙思想と読み取って、立論しました。近代以降は儒学思想は国政に沿う路線と抗議する路線と二つに分かれて展開します。国政に沿う路線を従った儒學者たちは「天皇制・家族制度」が許容する範囲で儒学思想を声高に主張しました。それを象徴するのが『教育勅語』です。

国政に埋没することを潔しとしなかった人々の流れには、先に紹介した啓蒙思想家たちの外に、キリスト者たち、無政府主義者たち、共産主義者たちがいました。何れも西学の洗礼を受けた人たちです。概ねは儒学思想を基礎教養として身に付けていました。

国民は天皇の臣下・赤子であることを国民教育の現場で浸透させ、或いは儒学思想を根本理念とする民間の結社の啓蒙活動の下、儒学が唱える性善説が国政との緊張絡みで浸透するようになりました。新儒教、殊にその性善説は、近代に於てこそ、国民教育の中に組み込まれて、国民の間に深く浸透したのです。

## 二 心学は宗教思想である

万人が仏性に恵まれていることを説く禪心学（その典型が盤珪永琢（1622-1693）です）、性善説を説く儒教心学（朱子学・陽明学）。共に自力主義です。仏性を、或いは善性を、万人が本来的に固有しているということを科学的に証明することは出来ません。Evidenceがないのです。エホバの神、或いはアラーの神が実在することを科学的に証明することは出来ません。Evidenceが無いのです。Evidenceが無いという意味では心学と同案です。Evidenceが無いものの、それを有ると確信して信ずる考え方を私は宗教と定義します。キリスト教もイスラム教も、それぞれが信ずる神は実在すると信じて信仰生活を送っています。心学の場合は審判し救済する神がいないので、宗教思想ではないと考えられてきましたが、神の実在を前提にしない、もう一つの宗教思想であると考え、その特色が分かりやすいと思います。

心学の興味深いところは、神の実在を信じ、神の審判と救済を信仰する人たちを、排斥

しないということです。自分達の心学とは明らかに違うわけですが、それを殊更に異端審問はしません。ましてや宗教戦争に展開することはありません。積極的相対主義とでもいえましょうか。もし神が実在するにしても、人間が神に仕えて神の世界を実現しようと努力する僕（しもべ）ではありません。神は自力で生きようとする人間を温かく見守っている支援者であるととらえます。とことん人間中心主義の宗教思想なのです。

その意味では、禪心学がいう仏性、儒教心学がいう善性、それが生得的に固有しているという自力主義は、根本的に自主自由なのです。その自主自由は非心学の人々とも共有します。そもそも、この自主自由の宗教思想は一人信者が基本であり、教祖・教団・教義・戒律が設けられることはありません。緩やかな規約（約束事）はありますが、約束違反を根拠にして排斥することはありません。心学は緩やかな思想運動なのです。

宗教学は神が実在することを前提にした西欧で誕生し発達した学問分野です。ですから、これまでの宗教学者が心学思想は宗教ではないと決めつけてきたことはごく自然なことでした。そのことを承知の上で、心学はもう一つの宗教思想であると云うことを主張したいと思います。

心学の根幹は善性・仏性を固有していることを信じることです。このことを「悟る」（大悟）といいます。これが心学者の初めの一步です。神に救済を祈願する「祈り」の宗教とは異なるのです。「悟り」を得るために努力する営みを禪心学では「座禅」、儒教心学では「静坐」といいました。この功夫も自力で行います。孟子は「自得」といいました。

心学は、科学的に証明できない非合理的なことを「神の恩寵」とか「奇蹟」として認めることをしません。わたし達が生活の現場で認知できることを真理として認めます。唯一の例外は形而上の本性を認めることです。この故にこそ心学はもう一つの宗教思想であると認めたいのです。

この人間中心主義の宗教思想をもう一つの宗教として提言したのは東京大学文学部の宗教学の主任教授であった岸本英夫博士（1903-1964）でした。岸本博士は米国のジョン・デューイ博士（John Dewey, 1859-1952）に啓発されたとのこと。とても興味深い提言でしたが、岸本博士の晩年十年は癌と闘う生活であったために、神の実在を前提にしない、もう一つの宗教思想について十分に考察できなかったことはとても残念なことでした。神が在（ましま）すと信じる信仰を宗教そのもの（religion）、もう一つの宗教思想を宗教性（的）（religious）と分別したとのこと。この分別を応用するなら、心学はreligiousとしての宗教思想ということになりましょうか。この二つは単なる違いであって優劣はありません。

江戸時代に儒教が紹介されてその修己・治人論が、新世界を開拓しました。平和主義（王道政事）と自力主義（性善説）です。実際の政治は権力抗争が付きものですが、それでも平和主義こそが王道であるという自覚は平時にはありました。また、他力救済論の宗

教思想の勢力が衰えたわけではありませんが、自力信仰の種が播かれて普及したことの意義は大きかったと言えます。自力主義は独り信者の信念ですから、自らが自力主義の宗教の信者だという自覚がありません。個人があくまでも心掛けとして、自己が本来持ち合わせている可能性を自力で開花させる努力をすることになります。他者と共に幸福に生きることを目指して、善性に促されて誠実に勤勉に生きることを生き甲斐とする処世哲学の源泉なのです。この処世哲学は宗教として語られることはありません。無意識の内に覚悟されているともいえます。それほどに性善説は日本人に与えた恩恵・影響は甚大だったのです。

### 三 心学・性善説の現代的意義

儒教心学は修己と治人を二焦点とする楕円形の思惟構造です。治人論は為政者に責任倫理を促すものでした。その限りでは現代でも意義がありますが、儒教が準備した政治制度には近代政治の根幹を成す基本的人権を尊重するという綱目が成熟していません。その意味では儒教思想が知的資源として意味を持つのは専ら修己論であると言えます。その修己論を自力主義・自力救済論として把握したうえのことです。現代世界は、第一には、理性を人間の本性と見なした科学主義が席卷しています。神無き時代ともいわれる所以です。第二には、自国文化第一主義、経済第一主義の功利主義です。

ニーチェが神は死んだと宣言してから一世紀以上が過ぎました。然も尚、神に救いを求める宗教運動は今こそ盛んです。人は救いを求めるのです。朱熹は神が実在すると信じる人は、そのように信じて生きなさい。神の実在を信じられない人は、神無き世界を生きなさいという意味の事を述べました。朱熹は心学がもう一つの救いの道、安心を得る道であることを説いているのです。この点は現代でも思索の資源として活用する価値が有るのではありませんか。朱子にせよ王陽明にせよ、個別的な提言も示唆に富むものが多いのですが、一番に価値あるものは心学の原理そのものではありませんか。

情報科学が飛躍的に進歩し、人と物の交流が迅速になりました。全球化の時代です。それが人類にもたらした恩恵は甚大です。しかし、その反面、全球的規模で人々を悲惨な不幸に追いやっていることも事実です。国際社会は国家を単位にして動いています。又、国際企業は功利主義に徹して活動しています。勢い、経済第一主義、それも自国経済第一主義の趨勢は加速度を増すと思います。国際主義の後退が歴然としています。人類史を顧みて、人間がいかに努力しても、この難局を乗り切ることは出来ないと観念して、一切を神の裁きに委ねることが賢明であるという宗教団体が力を増しています。しかし、裁く神の実在を万人に篤信させることは不可能です。大方は途方に暮れているのが実情でしょう。

それでは、どこに希望を見出したら良いのか。一つは神様の計らいに。もう一つは人間の覚悟に。孟子は戦国時代の悲惨さを目の当たりにして、それを打開する最後の切り札と

して、「人の本性は善である」を持ち出しました。現実には性善説を裏切る事態が続出していました。孟子は打開策として個別的な処方箋をも提言していますが、その究極の源泉は人の本性は善であるはずだという一点でした。わたし達も、この孟子の提言に希望の燈を見出したい。最後の掛けです。人間愛、ヒューマニズムと言い換えても良いと思います。

急いだために、拙い立論になりましたが、中国哲学を学ぶことの現代的意義の一つを紹介することになったかと思います。

附記。2018年9月6日から12日に掛けて、江蘇省の無錫・南京・泰州・蘇州を廻る調査旅行をしました。本稿は9月7日に南京大学で行った講演の要旨です。

鍵言葉。性善説。朱子学。陽明学。心学。宗教思想。